

(一社)大阪大学ナノ理工学人材育成産学コンソーシアム

令和元年度 第4回ナノ理工学情報交流会

「地球を守る:環境技術の最前線」

本年度第4回目のナノ理工学情報交流会を開催いたします。産学双方の意見交換の場として、コンソーシアム会員をはじめ、ご関心をお持ちの多数の方々のご参加を歓迎いたします。

主催: (一般社団法人)大阪大学ナノ理工学人材育成産学コンソーシアム
共催: 大阪大学ナノサイエンスデザイン教育研究センター、
大阪大学産業科学研究所産業科学ナノテクノロジーセンター

開催日時: 令和2年3月4日(水) 13:00~17:30

開催場所: 大阪大学豊中キャンパス 文理融合型研究棟・3階305号室

遠隔配信地: 大阪大学東京オフィス(霞ヶ関)、四日市商工会議所
これら会場の詳しい場所については下記をご参照下さい。
http://www.insd.osaka-u.ac.jp/nano/02_shakaijin/map/Maptop.htm
その他、現在ナノ理工学社会人教育プログラムのサテライト教室を開講されている企業様は(遠隔講義配信)による受講が可能です。配信をご希望の場合には、コンソーシアム事務局(nano-cons@nanoscience.or.jp)までご連絡下さい。

開催趣旨: 近年、温暖化に起因する異常気象の頻発や廃棄プラスチックによる環境汚染拡大などから、これからの生活環境悪化が懸念されている。また、持続可能な開発目標(SDGs)への関心の高まりやESG投資の活発化から、環境配慮に対する企業姿勢が、厳しく問われるようになってきている。このような背景を踏まえ、本情報交流会では、環境浄化や温暖化ガス削減などの最新の環境関連技術を紹介する。

費用: コンソーシアム会員、学生及び大阪大学教職員は無料
(コンソーシアム企業会員の場合、社内から何名でも無料で参加が可能です。)
四日市市商工会議所、けいはんなR&Dイノベーションコンソーシアム会員は無料、
上記以外の参加者は資料作成費として5,000円/人を頂戴します。

参加登録: 氏名、所属、参加会場、連絡先住所を記載の上、メールにて大阪大学ナノ理工学人材育成産学コンソーシアム事務局へお申込み下さい。
E-mail: nano-cons@nanoscience.or.jp
HP: <http://www.nanoscience.or.jp/>

登録締切: 令和2年2月26日(水)

問い合わせ: 大阪大学ナノ理工学人材育成産学コンソーシアム事務局
TEL:06-6853-6859(FAXと共通)

[講演プログラム]

13:00 13:10	開会挨拶 大阪大学 ナノ理工学人材育成産学コンソーシアム 代表理事 伊藤正
13:10 14:10	電気化学変換によるCO₂資源化技術の取り組み 御子柴 智 氏 (株式会社東芝 研究開発センター 研究主幹) 近年、低炭素社会を実現する新しい技術としてCO ₂ の資源化技術が注目されている。東芝はCO ₂ 処理の高スループット化や高付加価値化が可能な電気化学的CO ₂ 還元技術に着目し開発を進めてきた。本講演ではこれら技術の東芝の取り組みについて紹介する。
14:10 15:10	気候変動の具体策「バイオマス・シオア構想」 倉橋 みどり 氏 (東京大学大学院・農学生命科学研究科 特任准教授) 温室効果ガスによる気候変動問題は、科学的にはすでに疑う余地のない事実である。にもかかわらず、遅々として対応策が講じられずにいる理由は、一方で「地球温暖化を止める費用は効果に見合わない」と考えている人々が世界を動かしているからだ。そこで、低炭素を実現しながら産業活動を行う社会モデルとして「バイオマス・シオア構想」を考案した。気候変動に対応する具体策の一つとして、その実現に向け動きだしている。
15:10 15:30	(休憩)
15:30 16:30	メタルバイオテクノロジー：微生物作用を利用した排水からの金属類の除去・回収 池 道彦 氏 (大阪大学大学院・工学研究科 教授) 主にハイテク産業において、レアメタルを含め多様な金属類 (半金属・非金属含む) が利用されるようになり、有害物質の制御、および希少資源の循環という両面から、排水や廃棄物中の金属類を除去・回収する技術の重要性がますます高まってきている。 本講演では、微生物の持つ金属類代謝機能を利用した”メタルバイオテクノロジー”による、金属類除去・回収技術の開発状況を、主にセレン含有排水を対象とした研究を例として紹介する。
16:30 17:30	水環境におけるマイクロプラスチック汚染の実態 田中 周平 氏 (京都大学大学院・地球環境学堂 准教授) 私たちの身の回りにはプラスチック製品があふれている。軽くて耐久性が強い結果、環境中に放出されたプラスチックはいたるところで残存する。毒性が疑われる化学物質の多くは疎水性であり、環境中の有機物質などを吸着し移動する。一部は生物に取り込まれ、ふたたび、私たちに戻ってきているのかもしれない。今回は、マイクロプラスチックに関する研究事例を分かりやすく紹介する。

オーガナイザー:コンソーシアム企画運営委員

沖野 剛史	(株)東芝
小澤 伸二	(株)カネカ
前田 和幸	住友電気(株)
鈴木 啓悟	(株)村田製作所
山本 宏	BASFジャパン(株)
若林 信一	パナソニック(株)
伊藤 正	大阪大学
藤岡 透	大阪大学